

【論文】

自己実現の「物語」をめぐる

— 心中という倫理思想 —

吉原 裕一

0 はじめに

出版物が著しく普及したわが国の近世において、早くから確立したジャンルの一つにいわゆる「諸国話」ものがある。これは、各地で起こった奇怪な事件に取材し、それらをまとめた短編集の総称で、文学史上よく知られたものとしては、荻田安静による『宿直草』^{とのいぐさ}や井原西鶴の『西鶴諸国ばなし』などがあげられる。⁽¹⁾

「諸国話」は、形式の上では『日本靈異記』を嚆矢とするわが国の説話集の系列に位置づけられようが、そのモチーフが従前とははっきり異なっている点にこそ、思想史的な意義を認めるべきであろう。このことについて、まず簡単におさえておきたい。

『日本靈異記』の書名が正しくは『日本国現報善悪靈異記』であるように、古くから編まれてきた説話集の多くは、〈因果の道理〉を説明するための「仏教説話」であった。これらは、民衆を教化する目的で、仏教思想の側から口承文学として流布されてきたのである。

ところが、戦国時代および安土桃山時代における社会と価値観の大転換を経た後、近世の人々は、もはや中世的な世界観の中に安住することはできなくなってしまった。自己の運命を切り開くために自らの実力だけを頼みとする下剋上の風潮は、あらゆる現象の説明を〈因果の道理〉に依存していたかつてのありようを否定したからである。もちろん、〈因果の道理〉がただちに効力を失ったわけではなく、曹洞宗の僧である鈴木正三(1579～1655)が〈因果の道理〉を主軸として仏法と世俗倫理との融合をめざしたように⁽²⁾、依然として〈因果の道理〉が民衆における道德観の一翼を担い続けたことも確かである。

しかしながら、近世の人々は、自己の生を〈宿世〉として仏の計らいに全て委ねるのではなく、そこに自助努力の余地があることを当然として受け止めていた。これは思想史の上では画期的な変化であったといえる。かつては、

逃れることのできない〈宿世〉をなぞることこそが生の営みであった。たまさかに自らの〈宿世を見る〉ことがあったとしても、すでに定まった〈宿世〉自体を動かすことはできない。人は、仏にすがり善業を積み、よりよい後世を願いながらも、自らの〈宿世〉をなぞり続けるほかはなかったのである。

しかし、近世において戦乱の無い日常というものが現出するに及び、人々は世俗倫理への関心を強め、たとえば朱子学を受容に見られるように、彼岸ではなくこの人倫世界に生の意味を求めてゆく。これは、彼らが〈因果の道理〉にかわる（あるいは、これを補完する）新たな世界観を獲得しようとしていたことを示している。このような姿勢で近世の人々が自己の生を見つめるとき、それは〈宿世〉ではなく、自己の〈物語〉として感得されるに至ったのである。

〈因果の道理〉は全ての人を包含する理ではあるが、それゆえ自らの業に抛る〈宿世〉自体は全く個人のものであり、他者の〈宿世〉は本質的に自己とは関わりのないものであった。一方、〈物語〉は自己の生の総体を説明するものであり、自ずから一貫性を備えていること、ならびにそれが現世における他者の誰かとの間で共有されていることを必須の条件とする。自己と他者とが共有する〈物語〉は、その両者が相成す人倫世界の中に限っていえば、まさに共有されているという事実をもって道理たる資格を有する。〈因果の道理〉のように全ての世界を貫いていなくとも、自己を取りまく特殊な人倫世界の中における道理であるならば、自己にとってその〈物語〉は普遍性という点で〈因果の道理〉とかわるところがない。すなわち、人の生とは、自己の〈物語〉を紡ぎながらもその中に他者の生を繰り込み、他者の〈物語〉をそれと認めつつもその中へ自己の〈物語〉を重ねてゆく営みである。換言すれば、近世の人々は世俗の人倫世界を舞台に、自他の〈物語〉の中を生きていたといえる。

「諸国話」は、こうした人々の新しい要求に応えうるような〈物語〉を孕んだ話の数々を提供したのである。そこには、〈因果の道理〉とは異なる自らの思い^ないしによって生きる人物像があった。読者にとって、登場人物たちは見知らぬ異境の住人であったにもかかわらず、彼らの紡ぐ〈物語〉を、読者は自らの〈物語〉と重ねつつ辿ることができたのである。ここにおいて、近世の人々は、受動的に僧より教説を与えられる「聴衆」から、〈物語〉を重ねあわせて自己をとりまく人倫世界を拡充してゆく積極的な「読者」へと変貌したのであった。「諸国話」を読むということは、〈宿世〉の内にとど

まりきらない生のありようを是認することなのである。

本稿では、上で述べた「諸国話」の特徴をよく窺い知ることのできる『諸国百物語』⁽³⁾のうち、「江州、白井介三郎が娘の執心、大蛇になりし事」⁽⁴⁾という話をとりあげ、〈物語〉が構築されてゆく過程を内在的に辿りつつ、その〈物語〉を一個の倫理思想としてとらえる視点から考察を加えてゆくことにしたい。

1 〈物語〉の起源

この話は、白井介三郎の娘（以下「娘」と表記）、ならびに高橋新五郎の息子（以下「男」と表記）を中心として展開する。時代は近世初期、場所は近江の湖西にあたる山間の村である。

家が向かいどうしで親しく、ともに裕福な百姓であった両家は、三歳の「娘」と五歳の「男」に許婚の約束を交わした。しかし、その五年後、新五郎が病死したことで高橋家は没落してゆく。介三郎は、「娘」が十五歳になったとき、先の約束を反故にして、隣村の裕福な百姓と新たに縁組を結ぼうとする。ところが、「娘」は祝言の当日、向かいの「男」を呼び寄せ、駆落ちを迫るのであった。

「娘」の思いは以下のように述べられている。自分は幼い頃から、向かいの「男」と許婚の間柄であった。今、相手方の身代が衰えたからといって、他家へと嫁ぐのは「道ならぬ事」である、と。

ここで大切なことは、「娘」にとっての〈道〉とは何であったか、という問題である。ある種のことわりであることは論をまたないが、それは〈因果の道理〉ではないし、たとえば約束は守るべきであるというような一般原則でもない。「娘」において自覚された〈道〉とは、結論から言えば、「娘」にとっての〈物語〉なのであった。これ以降の話は、「娘」が〈道〉をあくまでも貫くための努力、換言すれば「娘」が自己の〈物語〉を最後まで守ろうと願い続けること、それのみで尽きている。

では、どうして「娘」はこのように困難な〈物語〉を紡がねばならなかったのであろうか。そのことについて、二節を費やして整理してみたい。

そもそも、「娘」の生は、父親の白井介三郎が許婚の約束を結んだ三歳のときに始まると考えてよいであろう。この出来事によって、「娘」は将来を

も含めた自己の生の具体的なありようを与えられたからである。そして、当時の自然ななりゆきとして、「娘」はそれを自らのものと受け入れた。自分は〈高橋家の「男」の許嫁〉であり、将来は正式に「男」と「夫婦」になる。それを踏まえれば、現在の自分は許嫁としてふさわしくあらねばならない。

「娘」は、過去の生きざまが形成した自らの存在と、将来の生きざまを見据えた自らの当為とを二つながら主体的に自覚することで、この世界に自己を確かに位置付けたのである。こうした「娘」の意識は、「娘」をとりまく共同体（両家をはじめ、広くみれば「とちう村」全体）の人々が承認しているものであったから、「娘」にとってそれは共同体に守られた穏当な〈物語〉であり、極めて自然に実現してゆくものと思われたはずである。

この〈物語〉に即して見ると、向かいの高橋家は、「娘」の終の住処であり、本来的な自己の居場所であった。端的に言えば、「娘」にとっての世界は、現在の自分がいる白井家と、向かいの高橋家とで完結するのである。話の中では述べられないが、「娘」が十五歳になるまでの長い年月、この狭い世界で過ごした日常の何かにつけ、そういう自覚を深めてきたであろうことは想像に難くない。八歳の折に起こった高橋新五郎の死を、「娘」はほかならぬ舅の死として受け止めたであろうし、その後の高橋家の没落についても、同様に自分自身の運命として眺めていたことであろう。

隣村へと嫁ぐことは、それら一切の行為と、それを為したときの思いの全てを無にすることに等しい。長年にわたって「娘」が積み重ねてきたのは、日常の些事であったかもしれないが、その一つ一つへ込められる「娘」の思いが真実のものであったからこそ、その蓄積は「娘」の〈物語〉における〈来し方〉となった。〈来し方〉とは、今までの自分はしかじかであったという事実理解であり、それへの反省から、向後はかくあるべしという〈行く末〉が志向される。⁶⁾すなわち、〈行く末〉とは〈来し方〉のいわば理想形の投影であり、〈物語〉を実質的に支える土台は〈来し方〉である。したがって、〈来し方〉を持たない〈行く末〉だけの物語は、幻想に過ぎず、〈物語〉たりえない。ともあれ、〈来し方〉を捨てることは、〈物語〉の自己否定であるのだから、たとえ無理強いされたにせよ「娘」が承伏できることではなかった。

ところで、客観的な立場から見ると、高橋家と白井家の縁組はもともと両家が同等に裕福であることから企てられたものであった。高橋家の現状から推して、娘の将来を含めこの縁組には利が無いと白井介三郎が世俗的に考えるのは当然であり、隣村の裕福な家へと縁組を仕切直すのは、元来の方

自己実現の「物語」をめぐる（吉原）

針に沿った自然な対応であったといえる。

しかし、「娘」にとってはそうではなかった。許婚の約束は、確かに父親が一方向的に与えたものであったが、それを「娘」が主体的に受け止め、自ら将来の見取り図をえがいたときに、そのまま、「娘」が世界の中に自己を位置づけるべき座標軸の〈原点〉となった。先の繰り返しになるが、座標軸とは「娘」の〈物語〉であり、自己が何者であるかという説明、自己がこの世界でどのようにふるまうべきであることを示す説明である。父親の介三郎は、「娘」の内部で許婚の約束がこれほどまでに重い地歩を占めてしまったことを理解していなかったし、一方、「娘」は、許婚の約束を交わした際の父親の考えを理解していなかった。その齟齬は、運がよければ双方が気づかず済むことであったかもしれないが、高橋家の状況の変化によって、表面化してしまったのである。介三郎は、はじめに高橋家と縁組の約束をしたときと全く同じに、二度目の縁組を他家と結ぶ。「娘」にとっては、前者が絶対的な〈原点〉であり、後者がそれと矛盾するものである以上、後者を受け入れることは不可能であった。「娘」の〈物語〉においては、高橋家の没落など本質的なことではない。悲運な没落の次第をも取り込んだ自らの〈来し方〉であるのだから、〈原点〉と〈来し方〉さえ確かならば、「娘」の〈物語〉が揺らぐことはないのである。

2 〈物語〉から《物語》へ

しかし、「娘」の〈物語〉ではありえないはずの祝言の日が現実に訪れる。そして、「娘」をとりまく共同体は、そのなりゆきを肯定し、押し進めてゆく。「娘」が共同体と共有してきたはずの〈物語〉は、まさに完全に失われようとしている。「娘」は、自分がここに生まれここに死ぬのだと信じていた居場所たる世界を追われ、自己が積み上げてきた〈来し方〉を無かったものであったかのように見なされ、共同体の全てによって〈物語〉を捨てることを強要される。「娘」の自己を規定する座標軸、「娘」と世界とを繋ぐはずの座標軸を反故にして、世界が「娘」から離れてゆくのである。「娘」の「道ならぬ事」という言葉は、世界の全てが「娘」を裏切ってゆくことへの痛切な反駁である。

もちろん、共同体は「娘」のこのような胸中を慮ることはしない。共同体の関心事は、「娘」がその一員として常識的なふるまいを為すか否かという

事実だけである。もし「娘」が、あくまでも共同体の内部に留まろうとするのであれば、自己の〈物語〉を捨てねばならないが、それは「娘」にとっての端的な自己否定であり、意識上の死でしかない。それでは、共同体と共にある意味がない。

「娘」は孤絶感の中で、この共同体との決別を覚悟する。とはいえ、中世の説話によく見られるように、こうした状況下で自らの〈宿世〉をつたなく思っただけで出家することはしない。「娘」が断念したのは、共同体と〈物語〉を共有することである。「娘」は、この共同体の中で生まれ、育まれながら一緒に〈物語〉を紡いできた。しかし、ここに至って、共同体の方が、勝手に〈物語〉を放棄してしまった。「娘」にとって〈物語〉は健在であったのだから、自分を見捨てたに等しい共同体の中にとどまることと、自己の〈物語〉を守ることとを勧告すれば、「娘」が後者の道を選ぶのは自然であろう。ただ、ここにおいて「娘」は新たな自覚の契機を得たのである。その結果が、向かいの「男」との駆落ちとなる。「娘」がこの駆落ちによって実現を期待した内容を整理すると、やや煩雑ながら以下のようになる。

「娘」は、自分が共同体と同じ〈物語〉を抱いていたという認識が誤りであったことに気づく。父親との間でさえ、考えに齟齬が見られたように、正しくは、「娘」自身の〈物語〉と、共同体全体がもっている（と「娘」が考えていた）〈物語〉とが、ある部分で重なり合っただけで、本来は別々の〈物語〉であったわけである。それゆえ、「娘」は自身の〈物語〉を守ろうと決意する。そして、そのためには〈物語〉を本当に共有できる、新たな共同体が必要であることに思い当たったのであった。すなわち、共同体が〈物語〉を共有するのではなく（それでは〈物語〉が崩れる公算が大きい）、〈物語〉を共有するための共同体をつくることを目指すのである。今の時点で、「娘」はこの世界に身の置き所がない。現実的にもそうなのだが、このままでは「娘」と世界は意味的にも接点がない。先のような共同体をつくることによってのみ、「娘」はこの世界に関わることを得る。孤絶感に苦しみながら、「娘」はやはり〈物語〉を固守する道をとるほかはないのであった。

「娘」の唯一の希望は、向かいの「男」がいてくれたことである。（逆説的にいえば、この「男」の存在こそが「娘」の苦しみの根源であるとみることもできよう。かりに、親の高橋新五郎ではなく「男」の方が病死していたのなら、「娘」は周囲の共同体の思惑どおりに他家へ嫁いだはずである。し

かし、それは第三者的な見方であり、肝心なのは「娘」自身の思い做しである。）「娘」は「男」の存在に救いを見た。反故にされて実現しないかと思われた許婚の約束も、「男」と〈夫婦〉になることでのみ十全に成就する。だが、それはかつての「娘」の〈物語〉を忠実に復元する試みではない。「娘」が「男」に求めているのは、〈夫婦〉という新たに特殊な共同体の実現、それのみである。親をはじめとした周囲の共同体が容認してくれるような「夫婦」ではなく、むしろそれに背反するものであるけれども、「娘」がこの世界に唯一の居場所を見いだす可能性は、その特殊な共同体の実現の中にしかないのである。

「娘」が許嫁として生きてきた〈来し方〉は、それ自体が重い事実の積み重ねではあるけれども（だからこそ「娘」はこれを捨てることができない）、意味の上では「夫婦」という〈行く末〉の鏡像であった。「許嫁」とは、いつかは本当の「嫁」となるはずのものである。その〈行く末〉が消えれば、〈来し方〉は意味を失ってしまう。切羽詰まった「娘」にしてみれば、生活の内実も問わず、また「男」の思い做しさえも問わず、ただ〈夫婦〉にさえなれば自己の〈物語〉が守られるのだという一念が、自らの執心となって凝り固まってゆくのも無理からぬことであった。

ここにおいて、「娘」の〈物語〉はすり替わる。かつての〈物語〉を守り通すために、〈物語〉を守る共同体として、自分は「男」と〈夫婦〉になる。それが、「娘」の新たな〈物語〉となった。木に竹を接ぐようでは無意味だが、「娘」の中では〈物語〉と《物語》、この両者は連続している。しかし、《物語》に執着するあまり、「娘」は現実の生から離れ、さらにいえば現実の「男」からも離れてしまった。《物語》に生きる「娘」は、すでにかつての〈物語〉を紡いだ「娘」ではなくなっているのである。それでも、「娘」は自己の生の意味を求め、この《物語》一つに懸ける。

3 心中がめざすもの

かくして、「娘」は「男」に駆落ちを迫る。「男」の返答は、極めて穏当なものであった。「娘」の気持ちは有り難いけれども「我はかやうに成り果て候ふ身なれば、ゆめゆめ恨みは候はず。よきに縁づき候へ」という。「男」の考えは、白井介三郎らと揆を一にするものであり、少なくとも「男」にとって「娘」との縁組はすでに現実のものでなかったことは明らかである。落

ちぶれた身となって、「娘」を当たり前の幸福にはできないことをわきまえているからこそ、「娘」との縁組をあきらめ、よそながら「娘」が幸福になってくれることを願っているのである。

「男」は、自分の境遇をいわば〈宿世〉ととらえている。後に登場する「男」の母（故高橋新五郎の妻）もそれは同様であり、状況が好転するように、石山寺の観音に願掛けをしている。「男」は「娘」が決別した共同体の中で現に生きているのであり、向後もその姿勢は変わることがないはずであった。

「娘」は、「男」を世俗の道理から引き剥がし、自らの《物語》へといざなう。それさえ実現するのなら、「娘」の〈物語〉は確かに二人の間で共有されることになると思っていたためであったが、その《物語》は自分と〈夫婦〉になるのか否かを二者択一で問うものであるがゆえに、一切の妥協を容れる余地がない。したがって、「男」のやんわりとした拒絶に遭った「娘」は、自己の生に関わる全てをあきらめざるをえなかった。その帰趨として「娘」は自害しようとし、その本気に押された「男」は、つい「娘」との駆落ちに同意してしまう。だが、「男」は「娘」の《物語》に取り込まれたわけではない。「男」は世俗の道理を引きずりつつ、「娘」に関わっているのみである。世俗の道理が、この《物語》を容認するはずもなく、したがって、男は《物語》に触れることのないまま、ただ「娘」に引きずられてゆくのである。

「娘」は《物語》の成就をめざし、「男」と駆落ちする。

ところで、駆落ちとは、文字通り共同体からの「欠落」を意味する。「娘」は自らが属する共同体における道理に従えなくなったために、新たな共同体をつくって自己の《物語》を貫こうとした。ただし、元の共同体とは相容れない以上、閉塞的で特殊な共同体にならざるをえない。世俗世界から背き出る者は、当然、世俗世界に居場所がないのである。（だからこそ、現世に絶望した者にとって、出家という手段は有効であった。）

駆落ちした二人は「途方に暮れ」るが、それは「娘」にしてみれば予想済みの事態であった。世俗の道理の枠内では〈夫婦〉になれない二人なのだから、〈夫婦〉になろうとすれば、世俗世界にとどまることはできない。駆落ちは、その事実をあらためて確認するための行程なのであり、それがそのまま心中への道行きとなることは必至である。「娘」は「男」に入水を促し、「男」もそれに同意して、「夫婦もろとも手を取り組み」とある淵に身を投げる。「娘」の《物語》は、ここに完成したかに見えた。

しかし、「男」だけが木の枝に引っかかり、命を取り留める。「娘」の目

論心中心は失敗に終わってしまったが、これは先にも指摘したとおり「男」がまだ「娘」の《物語》に取り込まれていないことを意味する。木の枝とは、「男」が引きずっている世俗の道理にはほかならない。ここで、「男」は考えるのである。自分だけが助かったのも〈宿世〉であろう。それゆえ、ついに自分は「娘」と添い遂げることはかなわなかった。自分は出家して「娘」の菩提を弔おう、と。そして、「我が家」へと帰ってゆくのである。結果的に「男」が出家することはなかったため、形の上では、「娘」に引かれて一度は共同体から背き出ようとした「男」が、元の共同体へと帰っていった、ということになる。

「娘」は死に、そのあとには、満たされない「娘」の《物語》のみが残った。この《物語》は、その紡ぎ手である「娘」が死んだことで、実は「男」に預けられたのである。縁組が立消えになったことで、もはや自分とは無関係の存在だと思われた「娘」が、自分の心中相手となったために、「男」は初めて「娘」自身と向き合う契機を得た。現実の心中に至っても、「男」は「娘」の《物語》を共有できなかった。だからこそ、「娘」の背負っていた不可解な何かとして、「男」の心に違和感をともないつつ《物語》が託されることとなったのである。「娘」は自己の死を通じて、やっと「男」の意識の中に、何ものかとして存在することを得た。「男」にとっての〈来し方〉の中に、わずかながらでも確かに自分を繰り込ませることができた「娘」は、「男」の中で墓標にも似た居場所を与えられることになる。それは、娘が《物語》において目指していた特殊な共同体の、不完全な欠片であった。

「男」にそれと理解されないままに、「娘」の忘れ形見として《物語》は「男」の内に残された。かりに、「男」が言葉どおりに出家して「娘」の菩提を弔ってくれたとしても、「娘」は救われなかったであろう。向後、「娘」が心中を望んだ意味を問うことによって、「男」は「娘」の特殊な《物語》を理解しはじめる。亡くなった「娘」へ手向ける意味をもつものは、ただ「男」のこの営為だけなのであり、これによって、「娘」の《物語》は救われる可能性が残ったといえる。

4 《物語》から〈絶対願望〉へ

「娘」は生前、「男」と〈夫婦〉になることだけをめざしたが、それでは〈夫婦〉になれなかった。駆落ちも、心中も、「娘」が「男」に持ちかけて、

「男」が同意した行為であったが、結局は失敗に終わった。なぜ自分は「男」と（夫婦）になれなかったのであろうか、と問うことによって、結果を先取りしていえば《物語》は「娘」の〈絶対願望〉へと昇華してゆくのである。

「娘」は、「男」との共同体をつくることをめざして《物語》を貫こうとした。しかし、そのとき「娘」の思い做しから〈物語〉が抜け落ちていたことは、すでに述べたとおりである。結果的に、《物語》は内実をとまなわぬ器であったことが、ここへ至って明らかとなった。心中の不成立という事態が、それを如実に示している。

ふり返ってみれば、「男」の態度は消極的であったが、それが心中の失敗を招いた原因でないことは、きちんと踏まえておく必要がある。「男」は墮落ちも、道行きも、心中も、終始「娘」に突き動かされて行動をとみにしていた。すなわち、「男」は「娘」の《物語》を形の上では忠実に辿っていたわけである。「男」によって「娘」の《物語》は現実のものとなり、検証されて、それが失敗であったことが判明した。心中の失敗は、《物語》自体の失敗である。

もし、「娘」が《物語》によって成就させようと目論んでいたことを、本当の意味で実現するのならば、やはり〈物語〉は不可欠である。「娘」は、〈物語〉をかつて夢見ていたようなありのままの形で守ることが不可能だと知り、《物語》を紡ぎはじめたのであるが、それは性急に過ぎることであった。

あらためて眺めてみるならば、「娘」が自己の生命さえも犠牲にして、本当に望んでいたものは、《物語》でも〈物語〉でもなかったことになる。いま、それを〈絶対願望〉と表現しておく。死者となった「娘」が、これから新たな「物語」を紡いでゆくことはない。「娘」が自己の生の総体として紡ぎ続けてきた「物語」は、〈物語〉や《物語》を内包しながらも未完のまま動きを止めたが、そのとき「娘」の「物語」は、自らを固定し〈絶対願望〉となった。「娘」の〈絶対願望〉は、ただ静かに「男」の内にたゆたうのである。

「娘」は心中に際し、「男」に「永き来世にて同じ蓮はちす うてなの台にて添ひ申さん」ことを願った。「男」はこれに「无もつとも」と応えた。「同じ蓮の台」とは二人だけの〈夫婦〉という特殊な共同体であり、その実現こそが「娘」の《物語》であった。もしも不幸なことに、この心中が成功していたら、二人は永遠に〈夫婦〉にはなれなかったであろう。実は「娘」は、「添ひ申さん」ことをこそ《物語》に繰り込むべきであったのだが、先に当たり前の「夫婦」

として暮らす〈物語〉が崩れたことにより、「添ひ申さん」という視点を結果的に欠くこととなったのである。《物語》の中に、「男」は存在していなかったのだから、「娘」の思惑どおりに「男」が「同じ蓮の台」に乗ることはありえない。

「男」は《物語》の失敗を「娘」に示し、自分が生き残ることで「娘」の〈絶対願望〉が成就する可能性を保った。心中の失敗という事実を通じて、このような計らいを与えてくれた「男」は、「娘」にとって唯一無二の存在となったのである。最初、「男」は世俗における許婚の相手というに過ぎない存在であったかもしれないが、駆落ちから心中に至る一連の出来事を経るうちに、この「男」こそが、自己の生に十全な意味を与えてくれる可能性をもつ、世界でただ一人の存在であることを「娘」は最期において自覚する。このように、「娘」は「男」が自己にとっての絶対者にほかならないことを「理会」し、「男」を残して死んでゆくことができたのである。そうでなければ、心中に失敗した時点で、「娘」の執心は怨霊となり、「男」をとり殺さずにはいられなかったであろう。「男」という絶対者に出逢えたことで、少なくとも、「娘」の死が、不幸な死ではないことは確かであった。

かくして、すでに〈絶対願望〉でしかなかった「娘」は、「男」の内で、静かに何かを待っているのである。

5 心中という倫理的自覚

以上見てきたところが、この話の前半に相当する部分である。後半は、生き残った「男」が家に帰ってからの数年間にわたる出来事が綴られているのであるが、これを記述どおりの事実ととらえてもよいし、あるいは心中で死におくれた「男」が見た刹那の夢とみなすことも可能であると論者は考える。かいつまんでいえば、後半では、「男」が「娘」の〈絶対願望〉を辿り、理解し、成就させる過程が明らかにされているからである。人が〈物語〉を紡ぐ存在であるとみなすならば、もちろん〈物語〉は現実の生に根ざしたものではあろうが、客観的な現実世界よりも〈物語〉の内部世界にこそ、その人の生の意味があるといえる。よって、これから考察してゆくことがらの全ては、「男」の思い做しに基づくことを前提としている点を、ことわっておきたいと思う。

自己実現の「物語」をめぐる（吉原）

「男」の母は、石山寺への参詣の折に、さめざめと泣いている「十四、五なる娘」と出遭う。娘は、継母の苛めに耐えかねて、川へ身投げをしようとするところであった。不憫に思った母は、娘を家へ連れ帰り「男」と夫婦にする。夫婦仲は睦まじく、「男」は「過ぎにし悲しみも打ち忘れ」、間に生まれた息子は三歳に成長した。

ところが、その息子が、母親である女の昼寝している部屋へと出入りして騒ぎ立てる。「男」が見ると、「たけ一丈あまりの大蛇」が眠っていたのであった。大蛇は、元の女の姿となり、自分が「そのむかしの介三郎が娘」であると告げる。「其の方様に添ひ申したき執心、死しても晴れやらず」、女の姿となってこの年月を一緒に過ごしてきたのだという。「今はこれまで也。御名残をしく候ふ」との言葉を残して、女は消え去った。

さて、ここでの「過ぎにし悲しみ」とは、死んだ「娘」を思っのく「男」の悲しみである。ただ、それは自分と関わりのある一人の娘が死んでしまった、という代替可能な喪失感にとどまっている。したがって、新たな女との幸福な日常を通じて「男」が癒やされたことにより、そのく「男」の悲しみは消えてゆく。「娘」の喪失を、女が存在が埋めてくれたためである。心中にまつわる「娘」の《物語》は、「男」の中で忘れ去られようとしていた。

ところが、その幸福は思いがけないことから破綻する。女が自分は、かの「娘」であったことを告白し、それまでの日常は終わりを迎えるのである。死んだ「娘」が大蛇に転生したわけではない。「娘」は、死んだ「娘」のまま、大蛇の姿を見せただけである。三歳の息子もまた、死んだ「娘」との間になした子でしかない。

「娘」は、なぜ別の女の姿を偽ってまで、「男」との幸福な日常を現出して見せたのであろうか。いうまでもなく、それがかつての「娘」の〈物語〉が理想的に実現した光景であったからである。「娘」は三歳から十五歳になるまでの〈来し方〉、「男」の許嫁として〈物語〉を紡いできた。この〈物語〉は、正式に「男」と「夫婦」になる幸福な〈行く末〉をもって完成するはずであった。当時の「男」は「娘」を身近に眺めていたのであるから、知らないわけではなかったであろうが、「娘」との縁組を自らあきらめていたことにより、おそらくは意図的にその〈物語〉から目を背けたのである。

幸せな偽りの数年間を過ごしたのは、「娘」がそれを享受したかったからではない。「男」が「娘」の〈物語〉を理解するためである。「娘」が積み重ねてきた〈来し方〉の重みは、これほどのものであったことを「男」は身

自己実現の「物語」をめぐる（吉原）

をもって知った。心中の折、わずかに透かし見た「娘」の《物語》に、「男」は「同じ蓮の台」の実現を目指す「娘」の「執心」というものをまざまざと感じたことであろう。しかし、そこに「男」が入る余地はなかった。いま、「男」は「娘」の〈物語〉の中に「〈其の方様に〉添ひ申したき執心」を確かに見た。すなわち、「男」は「娘」の〈物語〉の中に、幸福な自己のありようが昔からすでに約束されていた事実を発見したのである。

それでは、なぜ幸福な日々は終わりを告げねばならなかったのであろうか。無論、「娘」の〈物語〉が、本当は実現することなく失われた幻であったからである。「娘」の〈物語〉を辿る「男」は、当然、それが現実に終焉を迎えたことを知っている。幸福な幻は、「男」がふと我に返った瞬間に消え失せる。呆然とする「男」には、〈物語〉のはかない余韻が残っただけである。

その後、息子がしきりに母を恋しがるので、「男」は「娘」と心中した池へと息子を連れて行く。「娘」は偽りの「女のすがた」で現れ、息子に乳をのませ、「暇乞ひして池にいらぬ」。それでもなお、母を恋しがる息子を連れて再び池へ行くと、今度は「大蛇の姿」で現れ、息子を呑みこもうとして消え失せる。息子はそれ以来、まったく母を恋しがらなくなった。

「男」は、幸福な〈物語〉をなかなか思い切ることができない。女と過ごした数年間は、すでに失われた幻であるにもかかわらず、そこから動けないのであった。〈物語〉をあきらめることができなかったのは、もちろん生前の「娘」も同じであった。ただ、祝言の日という外在的な要因に迫られて、「娘」は新たな《物語》へと押し出されていったのである。「男」の場合は、三歳の息子が父親を動かした。

かつて、「男」と「娘」が心中した場所における、「男」と女と息子の家族の邂逅はいかにも異常である。息子が恋しがるのは母親たる女であって、「娘」ではない。しかし、「男」は「娘」の死んだ池へと赴き、息子を女に会わせる。「男」は、ここで女にも「娘」にも自分からは会っていないのであり、自分が「娘」の死に場所であるこの池へとやってきた行為の意味が、まだわかってはいない。

同じ場所における、邂逅の再演が、またも三歳の息子によって実現する。今度は、女のかわりに、大蛇が現れる。この後、息子が母を恋しがらなくなったことで、「男」と女は会う動機を失う。だが、「男」はもともと、自発的に女や「娘」に会うことを求めてはいなかったのであるから、そのこと自

体はたいしたことではない。本当の問題は、別のところにある。

息子の変化によって、幸せであった家族の光景が完全に消滅した現実を「男」は思い知る。そして、一番肝心なことに、遅まきながら気づくのである。

幸せな家族といういわば共同幻想は、女が消えた後も息子との間で共有されていたために、「男」はその中に無意識的に安住することができた。これは、もちろん「娘」の〈物語〉なのであるが、その共同幻想が消滅したことによって、「男」はあらためて女の存在と自身で向き合わざるをえなくなる。そもそも女とは誰なのかを問うならば、彼女自身が告げたように、死んだ「娘」なのであるから、女の姿も大蛇も、全ては幻にすぎない。「男」が向き合うべき対象は、死んだ「娘」だけなのである。しかし、その「娘」は、「男」の近くにはおろか、もはやこの世界に存在しない。自分の幸福が、世界から失われてしまったことを理解した「男」は、さらに怖ろしいことに思い当たる。女が幻であったのならば、いま自分の眼前にいる三歳の息子とはいったい何者なのかということに、である。存在するはずのない息子が、存在しない母親を恋しがるのは、すでに死んでしまった「娘」が自らの不在性を訴えていることに等しい。「娘」はもはや訴えかけることはできないので、正確には、「娘」の〈絶対願望〉の存在を「男」が初めて自覚したというべきであろう。世俗の道理から足を踏み出さない限り、「男」が「娘」に本当に向き合うことはできなかつた。「男」は、ここに至って初めて、「娘」の〈かなしさ〉を見たのである。

反復になるが、以上の過程を整理してみたい。「娘」の幸福な〈物語〉が崩壊し、夢から覚めた「男」は、この世界に自己の確かな居場所などないことに、初めて気づく。そして同時に、「娘」の〈物語〉だけが、自分にとっての理想的世界であったことを自覚したのである。かつて、「娘」は「男」との〈物語〉を守ろうとして、新たな《物語》を紡ぎ、そこへ現実には「男」をいざなつた。しかし、そのとき「男」は「娘」の《物語》を共有できなかった。いまこうして、「男」が「娘」の〈物語〉を辿り終えたとき、それが《物語》へと続いていることを男は自ずから理解した。そして、その一連の物語が〈絶対願望〉という「娘」のただ一つの生の意味へと結晶してゆく過程は、「娘」にとって必然であったことを明らかに知つたのである。

「男」は、かつて失敗した心中の《物語》の中に、自己の姿を見出すことができた。もともと、「娘」が紡ぎ出した〈物語〉であり《物語》であつた

けれども、「男」はそれらを辿って、いまや自己自身の「物語」としてこれを共有することが可能となったのである。「男」は、生前の「娘」とはいつに出逢えなかったが、「娘」の物語を辿るという思想的な営為によって、「娘」の〈絶対願望〉と出逢った。〈絶対願望〉は、「娘」として、女として、子をなした母として、執心の蛇として、常に「男」へと呼びかけていた。だが、「男」を呼ぶ声は、次第に力を失ってゆく。最後に、三歳の息子という形をとったとき、その声は、ふっととぎれてしまう。

すでに「娘」の物語を自らの「物語」とした「男」には、「この有様のかなしさ」が感得できた。かなしいのは、もちろん、息子の姿ではない。それは幻にすぎない。さまざまな姿をとりながら、ずっと「男」を待ち続けていた「娘」の〈絶対願望〉は、〈ひとりで蓮の台に座る「娘」〉の幻影となっていた。自己の「物語」の内に、「男」は、あまりにもかなしい「娘」の姿を見た。いまや、世界の中に自己の確かな居場所がないことを自覚した「男」であるが、その孤絶感は、生前に「娘」がより明確に先取りしていたものである。「男」は、「娘」の物語を辿るうちに、それを発見したのであり、ここで深い水底へと独り沈んでゆく「娘」の〈かなしさ〉をも確かに辿ることを得た。

「男」は、いまこそ、自分が「娘」と同じ蓮の台に乗り、「娘」と添い遂げることが可能であると確信する。「娘」にとって「男」が絶対者であったように、「男」にとっても「娘」は絶対者であると自覚されたのである。「男」が池に身を投げたのは、意味の上で、かつて自分が失敗した「娘」との心中をやり遂げるためであった。「親子もろとも」というのも、息子は「娘」の幻なのだから、まさに「娘」と一緒に心中したことになる。「男」にとっても、「娘」との心中こそは、自己の〈絶対願望〉となった。ここにおいて、「男」と「娘」は、ともに望んだ〈同じ蓮の台〉という永遠の共同体をつくることに成功したといえる。

6 おわりに

心中という、穏やかでない響きをもつ言葉が意味するものは、単に「一緒に自殺すること」などではない。確かに、心中は自らの死を乗り越えてなされる行為であるから、自殺には違いない。だが、その死を懸けてでも、成就したいと願う何らかの目的があってはじめて、人は自ら死へと突入するので

自己実現の「物語」をめぐる（吉原）

ある。とりわけ、心中は、二人がそろって同じ死の意味を問う、心情倫理に基づく行為である。人が自分の生に意味を見いだすのと同様に、自分の死に意味を見いだすことは重要なことではなかろうか。本稿は、近世における一つの心中をめぐる、それが一個の倫理思想として結実してゆく過程を、「物語」という概念を軸として腑分けすることをめざしている。

「男」と「娘」の間に、確かな倫理的自覚がないままになされた一度目の心中は、失敗せざるをえなかった。二度目の心中が成功したのは、「男」と「娘」が二人で一つの倫理思想を共有したことを意味している。「娘」の「物語」だけでは、二人はおろか、「娘」一人さえ、願うようには死ぬことができなかった。「男」が「娘」の「物語」を思想的に迎えることで、その「物語」を補完し、二人の「物語」としたことで、二人の心中は完成した。二人はすでに死んでしまったけれども、彼らがこの世に残した「物語」は、われわれがまた、それを迎えることで自身の〈物語〉を確かめるための姿見となる。それは、近世の倫理思想がわれわれに残してくれた、貴重な人倫の自覚点といえるであろう。

注

- (1) 『宿直草』は延宝五年(1677)、『西鶴諸国ばなし』は貞享二年(1685)の開板。
- (2) 鈴木正三とその門人たちによる唱導活動は、『平仮名本 因果物語』『片仮名本 因果物語』（開板は寛文元年 1661 年か、それ以前）などの成果を残している。これらの編集意図は、古い伝奇的な仏教説話集とは一線を画し、確かな事実として認められる記事だけを〈因果の道理〉の「証拠」として提出することにあつた。こうした実証主義の姿勢は、広く近世的な傾向であるともいえるが、正三においてかくも先鋭的に顕れているのは、やはり彼の前身が、理屈ではなく確かな事実だけを重んじる武士（徳川家康・秀忠に仕える旗本で、関ヶ原や大坂城攻めにも参加したが、四十二歳で出家した）であつたことに起因すると思われる。この点に関しては、本稿の主題から外れるので、ここでは指摘するとどめておく。
- (3) 『諸国百物語』は編著者不明、延宝五年(1677)の開板。各巻二十話の五巻組から成り、書名通りに百話を収める。
- (4) 『諸国百物語』のテキストは、高田衛編・校注『江戸怪談集(下)』岩波文庫・1989年に所収のもの（東京国立博物館蔵の完本を底本とする）に拠つた。本稿でとりあげた「江州、白井介三郎が娘の執心、大蛇になりし事」の全文を、以下に引用する。ただし、括弧内の注記は、吉原が付した。

自己実現の「物語」をめぐる（吉原）

江州喜多郡、とちう村（現滋賀県高島市朽木柄生。湖西から京へ至る若狭街道沿いにある）、りうげ峠と云ふ所に、高橋新五郎といふ大百姓あり。五歳になる男子を一人持てり。

その向いに白井介三郎とて、これも劣らぬ百姓なるが、三歳になる娘を持てり。

互ひの親、ねんごろの余りに（度をこした親しみの結果）、のちのちは夫婦にもせんとて、いひなづけの盃をさせ、年月を送る所に、ほどなく男子十歳になりし頃、新五郎、かりそめに（ふとしたことで）病ひつきて、空しくなりけるが、その跡、ぜんぜん（次第に）衰へければ、介三郎、はじめの契約をちがへ、娘十五になるとき、隣在所の、有徳（金持ち）なる百姓と縁組して、すでに祝言の当日にもなりければ、

此の娘、思ふやう、我はいとけなき頃より、向いの男子といひなづけをも致しおき、今、身代の衰へたりとて、他所へ縁につく事、道ならぬ事なりと思ひ、下女を頼み、ひそかに向いの男子を呼びよせ、「さてさて其の方様と、我々、いとけなき時よりも、互ひの親の計ひにて、夫婦の契約いたし候ふに、今それがしを、他へ縁に付け申され候ふ事、かへすがへすも口惜しき次第也。祝言も今宵に極まり候ふ也。我をいつかたへも連れて退き給はれ」と云ふ。

男子、聞きて、「御心底のほど、かたじけなくは候へども、我はかやうに成り果て候ふ身なれば、ゆめゆめ恨みは候はず。よきに縁づき候へ」と云へば、娘、聞きて、「此の上は力なし（仕方がない）」とて、すでに自害をせんとする所を、男子、驚き押しとどめ、「さほどに思召さば、いつかたへも伴ひ申さん」とて、娘とともに、夜にまぎれ立ち退きぬ。

されども、何処をたのみと定めねば、とある所に休らひ、途方に暮れて居たりしが、娘、いひけるは、「此の世にて、添ひ申す事は、とかくに（何にせよ）叶ひ申すまじ。是れなる淵に身を投げて、永き来世にて同じ蓮の台にて添ひ申さん」といへば、男子も、「尤」とて、夫婦もろとも手を取り組み、底の水屑となりけるが、何とかしたりけん、男子は木の枝にかかりて、え沈まず。その間に道行き人、見つけて、救ひ上げければ、男子は助かりぬ。

男子、つくづくと思ひけるは、我不慮に、木の枝にかかる事、定業（苦業の果報を受ける時期が決定している業）未だ来たらぬ故なるべし。此の上は様をも変へ（出家して）、娘の菩提をも弔はんと思ひ、我が家に帰りぬ。

さて男子の母は、宿願の事ありて、石山（真言宗石山寺）の観音へ詣られけるが、瀬田の橋（現滋賀県大津市瀬田。古来より京を守る要衝として有名）のほとりに、十四、五なる娘、さめざめと泣きゐたり。母、立ち寄り事の様子を

自己実現の「物語」をめぐる（吉原）

尋ねれば、此の娘云ひけるは、「我は、これより北在所（北の村）のものなるが、継母にかかり候ひて、いろいろと苛まれ申すにより、あまりにたへかね、宿を立ち出で、此所にて身を投げ申さんと存じ候ふ」と、語りければ、母も不憫に思はれて、「さいはひ、我、一人の男子を持つ、これと夫婦に致すべし」との給へば、

娘よろこび、「よろづ頼み上ぐる」と云へば、母も喜び、これひとへに観音の引き合はせとて、此の娘を伴なひ帰り、男子と夫婦になしけるが、男子も過ぎにし悲しみも打ち忘れ、今は比翼の語らひ深くして、男子一人もうけたりしが、はや三歳になりける。

あるとき、夫、外へゆきたる間に、女房部屋に入り、ひるねしてみけるが、この子、母の部屋に入りて、母を見て、「わつ」と泣きては出で、「わつ」と泣きては出で、かくの如くする事、三度に及べり。夫、帰りて、此の有様を見て、不思議に思ひ、部屋に行き見れば、女房、たけ一丈あまりの大蛇となりて、余念もなく（すっかり気をぬいて）臥しめたり。

夫、恐ろしくおもひ、呼び起しければ、また元の女の姿となりて、夫にむかひ、「さてさて今までは深く慎しみ候ひしが、今は我が姿を見えまらせ候ひて（お見せ致して）、御はづかしく候ふ。我はそのむかしの介三郎が娘也。其の方様に添ひ申したき執心、死しても晴れやらす、今また女に様をかへ、年頃（数年来）相ひなれ申したり。今はこれまで也。御名残をしく候ふ」とて、かき消すやうに失せにけり。

その後、此の子、母をしきりに尋ねけるゆゑ、夫もあまりの物憂き（つらさ）に、かの池に連れ行き、「あまりに此の子、恋ひこがれ申すあひだ、今一度、姿を現し見え給へ」といへば、池のうちより忽ち、女のすがた、現れ出で、子を受けとり、しばしがほど、乳をのませ、暇乞ひして池にいりぬ。

その後、此の子、なほなほ母を恋しがり候ふ故、又くだんの池に連れゆきて、又呼び出だしければ、此の度は、池のうちより大蛇の姿となり、現れいで、紅の舌をふりまはし、此の子を呑まんとして、失せければ、その後は、ふつと母をば焦れざると也。夫もこの有様のかなしさに、その後、親子もろともに、かの池に身を投げて、つひに空しくなりけると、所の人かたり侍る。〔巻三の四〕

⁽⁵⁾ 〈来し方〉ならびに〈行く末〉という概念については、拙稿「倫理思想としての「時間」をめぐる考察」（『国士館哲学』第12号、国士館大学哲学会、2008）でもとりあげて論じている。